

「職業としての批評家」 讀書メモ

平成三十一年九月三十日

各段落の要点

へ段落一V

・批評家・作家共に近代人の宿命に耐へぬかばるるため

・作家以上に、この宿命に耐へぬくことを専門とする者が批評家だと考へる。

○近代人の宿命とは何か

「職業としての作家」よりまとめ

P.556 近代の「職業」は人間性を追放した

P.549 封建的支配関係においてほ

上から下への権力の流れ

← 集团的自我は解放↓ 個人的自我は清謐を保つ

← 「職業」は個人をおぼつてゐた

近代自我の覚醒により

権力の流れがせき止められ、逆流し、権力欲同士がせめぎあふ状況

← 不満の吐け口が個人的自我へ向かふ平静と純粋とを乱し濁す。圧搾される権力欲

← 「職業」のところに人間の価値が存在するとの前提が徹底的に風靡した。

集团的自我の営みとしての「職業」が純粋化し専門化
するに従ひ、自己主張としての権力欲は個人的自我上に
転化された

P.550

藝術家、中でも文學者は、人間性の最深・最高なる
ものの把握と表現を目指す予言者となつた

←
藝術は「職業」ではなくなつた

職業の否定と稀薄化が、社会への敵意を呼ぶ

精神の自由⇨個人的自我の充實

←
集团的自我の否定

←
社会そのものとの対立

・ 目前に敵をみかへた者の戦法・保身術

一 列隊間の形式・技藝で上體をおほふ

←
作家以上に、近代の「宿命」に耐へ、社会との

戦ひの急先鋒に立たんとする批評家の姿を言つた

へ段落二

・ 批評家は鑑定家ではない

一 作品の精神的真実⇨内容と形式の過不足の一致
⇨必然性の度合を感得し、真偽を見極く力を要す

・ 批評家の批評の基準は、自分のうちに真実を見出し
得ぬといふ境地以外はない

↓自分のたもつ機能にすぎない(段落三)

・ 職場で何の役にも立たぬ力。批評家

役に立つやうにみせかけはしても 役に立つてはゐない
肝に銘じて知してゐる

←

ぼく自身はこれほどつまらぬ人間であるから、すみえらうて
困いことゐる。

ぼくの批評の原理は、自己否定はるく
目的はつねに他人の否定にある。

へ段落三

・ エリオットの 批評家の 職能観

新しい作品、作家の出現により 破れた均衡を救済し
より、高次の 新秩序を建て直すこと。
歴史的傳統 社会秩序 文化の觀念の自覚

・ エリオットは、自己の真実と、クリスト教という

傳統に賭けてゐたため、自分や批評作品は

独断に陥つてゐる、独断を平和におかしてゐる。
サイコロジストにしてカトリック教徒であつた。

・ へぼくの眼もありはしない。ぼくは自分の、なんなる
機能にすぎぬといふ事実を、発見した。

機能にすぎぬから、なんものも、るり得ない。
なんものも、るいことを知った。

へ段落四

・ 職業として成りたため 批評家

モウリストたる批評家は、人間性や完璧をめぐす。

しかし批評とは否定的な精神であり、批評家の
習性は否定的であるかゆゑ、作家に敬意を
捧げる場合、この否定的な精神に対し、別の次元からの
否定かくはわてられるといふ二重否定の構造を要す。

単なる否定は、壁にぶつかると。

サント・パウロ

すぐれたサイコロジストたるかれは、十九世紀文藝手法と
しての心理主義の限界が看取されてゐた。
他人を解剖しつくしたかと思へて、結局は自己の
うつらあるものしか汲みとり得ぬナルシシスみの
病弊が見えてゐた。↓空虚な直面
←

自己より大なるもの、自己を限定するもの
直前の美を求めざるを得なかった

←

ナタールと歴史に批評対象と見出す

(しかし、安住の地とは有り得ない)

講壇批評の時代は去つたのだ

批評が副業であつた時代、批評家は、
過去の伝統や秩序に照し、整理といふ
地味な仕事とし、健康と幸福とを享受し得た。

フランスのモラリストなるとサント・パウロは、批評家と
人間発見の専門家にしてしまつた。批評家と

批評家はみづから人間の完壁性を要求し
その美理の試験臺のほうへはなはるうぬ
自分の自身を、自分の、あるいは時代の
美醜材料に供せんとしてゐる状況。

・ 群小批評家たるほくたつ現代の批評家は
セント・アーグより一歩進んで、すべからず現代に
身を投じていなければならない。

・ 批評家も眺められる存在として実践的性格を持つ

実験者として 被実験者

自己を見せ者のさうす

批評家の立脚点の
断崖のへりの様子を危ふさを
表現？

・ 検屍官としての批評家

虚無に到達し、そこから出発する。

・ シェストフ

読んだところで、自分の何もつづてはへはせぬと意をくる。
機能としての批評家はなかり、一種の本能によって
おのれの読むべき文章を直観し、それ以外は読まぬ。
現代の性格が身についた批評家

段落五

・ これまで述べてきたことはすべて假説である

批評家の属性を極端に拡大してみせたいで
あり、そこは批評家はもはや批評家以外の
ものにならないからぬ

しかし、あらゆる価値は、自己否定の一時手前
ふみとどまることにより、もつとも本質的ななり
価値的なる、自己を越えねばならぬか、越えては
ならぬ。

つまり、これまで述べてきたことは、この様な状況に
踏みとまり得てゐる假説だと言つてゐるのか？

・別の仮説もあり得るのである

事実多、自分の目の前に、自己と趣之、自己と対立する
新しい批評家 概念の誕生を見てゐるのだ。
それは前衛の批評であり、最大の強敵だ。

・この前衛の精神と、ほゞしく対立してみること、こゝに
職業家としての批評家」といふ主題をあきらめようか。
唯一の可能性がありはしないだろうか。

前衛（アベンギャルドのことか？） 伝統否定・革新をめぐる

柿の美とは是非とも 手に入れよう」と努力する

後衛

柿の美をいふとこまですまじい行ふか

柿の美の必要性を説く教理が真に正しいか実験しない

こゝで、柿の美とは何のことか？